



2301

文華の武力か

昭和十一年六月二十八日



逃ける人

自四月一日
至六月三十日
昭和十一年六月三十日



水上長次郎 八〇

小林 盈七〇

渡邊千代三郎 七二

矢口 達 四八

岡島 敬吉 五五

伊東信一 六二

大島辰次郎 五六

福田馬之助 八一

原 錦 吾七〇

久保田 讓 九〇

紀 淑雄 六二

澤村源之助 七六

高峰筑風 五六

堀越善重郎 七四

埃及全 アメド・アード 六八

本田岩次郎 七一

富谷鉦太郎 八一

池田菊苗 七三

男

伯

納所弁次郎 七二

胡漢民 五二

蒲川龜太郎 四九

松村 務 五三

岡崎國臣 六三

松村 瞭 五七

榊沢保惠 六七

萩原タケ 六四

松浦良春 八七

尾竹竹坡 五九

上野金太郎 七一

土田夢僂 五〇

山下谷次 六五

加護谷祐太郎

長尾半平 七二

杉森此馬 七九

鈴木三重吉 五五

網島佳吉 七七

國際聯盟座

2303

鬼哭秋々

(エチオピア皇帝
恨みの数々)

昭和十一年六月三十日



2304

財源獵り

昭和十一年七月二日



馬場藏相

「あるぞく」

町得税相續

税何んでも

税の値上げ

鉄道郵便

の値上げ

と利益

繰り入れ

まだ

ある

まだ

ある

いく

らで

ある



2305

聯盟エチオピアに止めを刺す

昭和十二年七月五日



エチオピア皇帝

「極悪非道の伊太利聯盟。」

神も佛も無いふらは、

七たひ悪魔に

ふり代り、

遺恨重

ある歐米を、

捺落の底に

蹴落し呉れん。

聯盟

「エッ、熱念深い奴だ」

ヂタバタしゐいて往生しろ

伊太利

「聯盟、御苦勞じやふ」



2306

収賄檢舉

昭和十一年七月七日



深い處に
まだ大きな奴
がありそうだ



2307

二六事件判決

昭和十一年七月七日

(将校十七名死刑)



将校
「ア！早く
自決すれば
よかつた」



2308

廣東政府潰滅

昭和十一年七月十八日



蔣介石
コレデ支那統一が出来た、
いよく大總統はあつた
段取りだ



2309

大雷雨

東京市内外に
三十五ヶ所落雷
昭和十一年七月十九日



2310

米支借款
支比排日協定

共に成る

昭和十二年七月廿日



獨

米

蔣介石
おい、ヒリ尻ン！
うまいものに
有りついたぞ。
排日の方を
シッカリやろぞ。



比

「オット合点だ」

2312

次回オリンピック
競技開催地
日本に決定
昭和十一年八月一日



2313

渡臺

颶風大雷雨、
怒濤山嶽に似たり

昭和十一年八月二日



2314

阿里山より新高山を望む

昭和十一年八月七日



2315

臺南情調

昭和十一年八月九日





2316

長嘴は長尾に及ばず

昭和十一年八月二十七日



2317

成都事件

(八月廿四日突発)

昭和十一年九月一日



「日
猫をケシかけて
大事ふ鳥を
殺したのは
貴様だ
ろう」



支

「野良猫のイタツラだ、

猫は叱つて置くよ

2318

西班牙内乱(政府軍不利)

昭和十一年九月五日



2319

北海事件

(日本人慘殺さる)

昭和十一年九月十四日



日本

「又ワルサを

しやがつたお

十九路軍

「こわく

あいヨー



2320

島津治子女史

昭和十一年九月十六日



「妾は天照大神の妹じゃぞへ、

姉姫も代つてこの日の本の國を

治めるのじや、

大やいまの津々浦々を治めるま由て
島津治子とは申すのじや

2321

手のつけられぬ支那

昭和十二年九月二十日

その糞溜を潔はなければ
毒虫は絶やせぬ



2322

此の化物を奈何せん

昭和十一年九月二十三日



2323

ブラジル使節来る

昭和十一年九月二十四日



「ブラジル
ヤー、小さいが
いいからだですね」

日本

「ヤー、よく総身は智慧が廻るね、
御馳走をするから澤山食ひ給へ。」



2324

邪教ひとのみち手入れ

昭和十一年九月二十八日



人の道
ではふくて
獣の道だ。
倒る振るこ
正体が現は
れるそうか。



2325

逃

ける人

自七月一日

至九月三十日

昭和十一年九月三十日



男

太田馬太郎七六

富田 漢仙五六

市川 中車七七

満谷国四郎六三

伊達宗經六七

岩原謙三七四

新田長次郎八〇

大塚太郎六二

岡崎邦輔八四

曾山親民六七

南 鷹次郎七八

加納友之助六五

栗野慎一郎七三

林 和太郎八七

石原健三七三

三木栄八六五

箕田長三郎六二

加々美武走四七

田中梅吉八四

梅谷光貞六四



2326

日支交渉

昭和十一年十月二十五日



日 否か應か
即座に
返答しろ

漫漫支
的、的、



2327

大臣の末路

(内田信也
收容さる)

昭和十一年十一月四日



2328

帝國議事堂建築竣工

昭和十一年十一月七日



成る程、世界一だろう。

「ゴロツキ議員みは勿体ない。」



「五派だが、二千六百万円とは
ベラ棒だ。」



「素敵だ、堂々巍々だ、」



「不得要領の様式だ。」



事堂竣工

局



2329

日本内地人口

昭和十二年十一月十日



府縣別推計人口

單位百▲印
は男が多い

總數

全國七〇、二五八、二
市部二、三六二、〇二
縣部四六、六四八、〇

▲北海道	一、二一、八
▲青森	九八五、四
▲岩手	一、〇六〇、八
▲宮城	一、二五四、〇
▲秋田	一、〇四八、二
▲山形	一、一二四、五
▲福島	一、五九六、九
▲茨城	一、五六一、九
▲栃木	一、二〇六、二
▲群馬	一、二五四、二
▲埼玉	一、五四三、四
▲千葉	一、五六二、三
▲東京	六、五七〇、八
▲神奈川	一、八八六、一

▲新潟	二、〇〇八、八
▲富山	八〇三、一
▲石川	七七〇、八
▲福井	六五二、六
▲山梨	六五〇、〇
▲長野	一、七一三、四
▲岐阜	一、二三五、七
▲愛知	一、九六九、六
▲三重	一、九二四、四
▲滋賀	一、一七八、二
▲京都	一、七三三、八
▲大阪	四、四五四、四
▲兵庫	二、九八一、一
▲奈良	六二五、五
▲和歌山	八七一、一
▲鳥取	四九〇、七
▲島根	七四八、七

▲岡山	一、三四二、八
▲廣島	一、八二八、五
▲山口	一、二〇二、〇
▲徳島	七三一、三
▲香川	七五二、〇
▲愛媛	一、一六九、七
▲高知	一、七〇三、六
▲福岡	二、八〇五、〇
▲佐賀	六八五、〇
▲長崎	一、三三〇、三
▲熊本	一、三九四、〇
▲大分	九八七、七
▲宮崎	八三七、八
▲鹿児島	一、五九八、七
▲沖縄	五九五、六

市別推計人口

人口十萬以上
單位百▲印
は男が多い

▲東京	六、〇八五、八
▲大阪	三、一〇一、九
▲名古屋	一、一九五、五
▲京都	一、〇七四、四
▲神戸	九三八、二
▲横浜	七三八、四
▲福岡	三、一八四、四
▲仙台	二、九七九、七
▲札幌	二、三九四、九
▲旭川	二、二四四、五
▲小樽	二、一七二、一
▲函館	二、〇九六、二

▲札幌	二、〇六二、二
▲札幌	一九〇一、三
▲札幌	一九五、〇
▲札幌	一九一、一
▲札幌	八八、五
▲札幌	八四、九
▲札幌	八三、八
▲札幌	八一、七
▲札幌	六九、八
▲札幌	六三、二
▲札幌	五五、四
▲札幌	五二、八
▲札幌	四五、七

▲札幌	一、四一、二
▲札幌	一、三七〇、〇
▲札幌	一、三五、四
▲札幌	一、三二、九
▲札幌	一、三一、一
▲札幌	一、二四、四
▲札幌	一、一五、〇
▲札幌	一、〇六、六
▲札幌	一、〇四、一
▲札幌	一、〇三、五

2330

マドリードの鏖戦

昭和十一年十一月十二日

革命軍



政府軍



2331

巴里東京間ジャビ一機墜落
十三時開飛行

昭和十一年十月二十日



烈風濃霧の爲め
背振山に衝突して



2332

尾去澤

鑛山堤防決潰慘事

昭和十一年十一月二十日



毒水金町を浸し
て血の池と化する

死者約一千
傷者約數百



2333

日獨防共協定

昭和十一年十二月二十五日



2334

帝冠よりは愛戀

昭和十一年十二月十日

英帝秘土和奴才八世と
姫婦尊主人



2335

英皇帝退位

六世即位

昭和十一年十二月十二日



シンブソン夫人

お前とおあらばヨシ、どこまでも、
手鍋下げてヨシ、いとやせぬ、

皇帝

「君と寝ようか、五千石取るか、
何の五千石、君と寝ようか」



2336

張學良蔣介石を檻禁す

昭和十二年十二月十三日



ソ聯「學良でかした、

逃がしてはいけふいぞ

張

「うまく生捕つたが

あとはドーすれ

ばいいんだ

蔣
計ると
鬼つて
計られた、
を「残念か



2337

群盜割據

昭和十一年十二月二十二日



2338

泰山鳴動屁一つ

蔣放還され
學良下野か

昭和十二年十二月二十六日



蔣

「ヤイ、學良、

いかい御世話

じやつたな、

また

地獄

で逢

はうぜ。



學良

「畜生！

一文もあられねー

無駄骨を

折ら

せや

がっ

たふ。



馬鹿

學良！

ザマー見ろ

逃ける人

自十月一日
至十二月三十一日

昭和十一年十二月三十一日



草間 滋五

中鉢 美明

矢部規矩治 充

井上 正一 八七

神谷傳兵衛 六

市川右團次 七

長岡熊雄 五

伊東祐彦 七二

下田歌子 八一

頼母木駒子 五

魚 迅 五

木村久太郎 七

安田善次郎 五

伯 壬生基義 六

岡倉由三郎 充

山中定次郎 七

原 保太郎 九

今成日誓 九

伯 勸修寺経雄 五

段 祺 瑞 七

男 大寺純藏 六

小倉伸平 五二

秋山高三郎 五九

田村新吉 七四

竹内友次郎 六五

岡田朝太郎 六九

林 民雄 七三

緒方十右衛門 六二

谷 孫 六八

田部 芳 七七

中山秀三郎 七三

菊沢季磨 五二

鴻 雪 七六

サバルザロフ 六六

子 大岡 忠禮 四

今村恭太郎

阪本彰之助 八〇

張野菊之助 七一

佐々木岩次郎 八四

家永豊吉 七四

大川平三郎 七六

2340

昭和十一年畧譜

昭和十一年十二月三十一日



官公辞令

神宮閣係施設調査会委員改任付
 昭和十一年農公氏改任青森令満時
 相模屋敷府室古蹟名勝天然記念物保護会委員改任付

七月 内閣
 八月 農林省
 十月 文部省
 内閣

関係工事

片倉氏邸 (長野)
 今泉主宅 (印旛町) (群馬)
 村井三雄邸 (山形)
 茶地本邸 (後定)
 可睡音附属建築
 愛育会館設計相次
 成田山影勝寺計画
 甚田津畔社同題
 井上中將邸
 の隠居石塔及燈籠
 藤田政樹邸 (名古屋)

五月 美松高工
 五月 名古屋文化講堂
 六月 承德有志会
 七月 和歌山満堂会
 八月 台湾建築会
 八月 台湾建築會
 八月 樂山社
 八月 飯能夏期講習
 九月 啓明会
 十月 仏教青年会
 十月 中央美術学校
 十月 三宮同
 十月 京都公民教育会
 十月 旺治聖徳記念会
 十月 中央美術学校
 十一月 古岡
 十二月 建築学会

講

演

神社建築と日本精神
 支那建築の養生と衰退
 熱河建築の保存の意義
 日本仏教藝術概論
 甚田津畔社同題
 神社と建築
 仏教藝術
 神社建築と国民精神
 熱河建築の史的價值
 仏教藝術
 東西文化の融合
 神社建築とその精神
 建築の趣味
 熱河建築保存の多急務
 支那建築の本質
 神社と建築
 熱河建築に就て

七月 美松高工
 五月 名古屋文化講堂
 六月 承德有志会
 七月 和歌山満堂会
 八月 台湾建築会
 八月 台湾建築會
 八月 樂山社
 八月 飯能夏期講習
 九月 啓明会
 十月 仏教青年会
 十月 中央美術学校
 十月 三宮同
 十月 京都公民教育会
 十月 旺治聖徳記念会
 十月 中央美術学校
 十一月 古岡
 十二月 建築学会

234

昭和丁丑元旦

昭和十二年元旦



幾千萬路はありとも、

行かてやは、

牛のあゆみの、

よしおそくとも、



2342

金鯱受難

昭和十二年一月六日



名古屋城

天守の金鯱の鱗

五十餘枚を盗む(價格僅に約五千円)

鱗の大き六七寸乃至三四寸

厚さ官製はがきよりやと薄しとかや



2343

西班牙内亂に弥次馬

昭和十二年一月十日



軍乱反

政府軍



2344

空前の大豫算

昭和十二年一月十九日



「この大飯が
食ひきれるか。」

政府
「何のこれしき。
平らげて
見せる。」



2345

國民脅威に戦く

昭和十二年一月二十日



2346

濱田寺内の喧嘩停會

昭和十二年一月二十三日



浜田国松

俺ア町人でも九千萬国民を代表する代議士様だぞ
 貴様のやうな武士は武士でも輿節の出がらし
 同然の青二才に威張らせて置くものか。



寺内陸相

「無礼千万お町人の、

苟中陸軍大臣たる身共み對して

言葉を送す不届中の、

手討は致す、そこ動くふ。

2347

内閣総辞職

昭和十二年一月二十三日



さてく脆い
建物で
ござる

寺附

浜田



2348

大命宇垣大將に下る

昭和十二年一月二十五日



アッハ、……人生一たび宰相とあるも悪くハ
 ない。ナニ？成算があるかつてり！
 馬鹿！赤ん坊を産む替古をしてから嫁
 又行く奴があるか。

氏名	職業	年齢	脳重(克)	変異(克)	氏名	職業	年齢	脳重(克)	変異(克)
クロムウェル	政治家	59	2331	+886	岩野泡鳴	思想家	48	1420	+47
ツルゲーネフ	小説家	65	2012	+697	三浦守治	医学者	59	1415	+73
バイロン	詩人	36	1807	+522	青山胤通	全	59	1410	+68
ビスマルク	政治家	83	1807	+522	中川忠順	美術史家	56	1400	+58
カント	哲学者	82	1600	+315	高橋順太郎	医学者	65	1390	+89
桂太郎	政治家	66	1600	+299	ウィルソン	大統領	61	1379	+84
寺野精一	造船学者	57	1600	+258	一戸直藏	理学者	43	1375	+2
三宅恒方	生物学者	41	1550	+177	山川健次郎	物理学者	78	1375	+66
沢柳政太郎	教育家	63	1505	+204	吳秀三	精神科学者	68	1360	+59
田口和義	医学者	65	1500	+199	土肥 廉蔵	文藝評論家	66	1345	+44
ナポレオンⅢ	皇帝	65	1500	+185	弘田 長	小児科学者	1	1330	?
浜口雄幸	政治家	62	1495	+194	ペッファースル	衛生学者	82	1320	+35
内村鑑三	宗教家	70	1470	+169	ガムベッタ	政治家	44	1314	-46
山極勝三郎	病理学者	68	1470	+169	大沢岳太郎	医学者	57	1310	-32
三宅やす子	小説家	43	1445	+210	中江兆氏	思想家	55	1310	-32
シルレル	詩人	46	1580	+220	ブンゼン	化学者	88	1295	+10
ヘルムホルツ	物理学者	73	1440	+150	緒方正規	医学者	66	1255	-46
ハイ子	詩人	57	1430	+85	柏村貞一	ク	50	1250	-123
夏目漱石	文学者	50	1425	+83	片山国嘉	法医学者	77	1250	-59
ダンテ	詩人	56	1420	+75	大沢謙二	生理学者	76	1225	-84

2349

脳

の重さ

村松常雄氏蒐集の二三
例の表より採筆改作

昭和十二年一月二十五日



昭和十二年一月二十七日



將官連

「誰が陸相を
かき立てるものか、
宇垣引つ込め。」

寺内

「この通りだ、

早くあきらめろ。

組閣本部

宇垣



2351

宇垣大將大命拜辭
林鏡十郎大將大命拜受

昭和十二年一月二十九日



林
「俺おら
異存は
あるま
いがお



宇垣
「矢つ張り
大慾は
無慾
じゃ



軍
閣下の為
あら犬馬の
労を竭し
ます



2352

軍部の鼻いき

昭和十二年二月一日



軍

俺が日本を背負つて立つ。

俺であければ国家を安んずる

ことは出来ふい



2353

林内閣成る

昭和十二年二月二日



バラク内閣
が出来たね



「結城丈けか
光って居る

郵局長官	大橋八郎	農林兼遞信	山崎達之助	高工兼鑛道	佐堂卓雄	司法	塩野季彦	海軍	米田光政	陸軍	中村孝太郎	大藏兼拓務	結城丈太郎	内務	河原田稼吉	総理兼外務文部	林銑十郎
------	------	-------	-------	-------	------	----	------	----	------	----	-------	-------	-------	----	-------	---------	------

2354

政党と政府

昭和十二年二月五日

(政党は多々
政府は観)



政党

セセ、ヒヒ、
ヒヒヒヒ...

政府

フフフフ、
.....

國民

へへへへ、
.....



2355

鈴木政友会総裁引退

昭和十二年二月十七日



喜三郎
「自慢の腕も瘦せ
とけて、足腰も立た
なくおつたが、
腹丈けはよく立つ。こゝろで引退が汝時だ。」

埋れ木の花咲く時もあかりしに
身のふる果はあいまありけり 頼政



2356

結城藏相善戰

昭和十二年二月十八日



虚々 實々 實中 虚中 有實 有虚 虚實 相合 歸無



2357

文部大臣候補者易驚卒人

昭和十二年二月二十二日



「これは大へんだ、
が、一ツも碌おつうは
無い」



新聞屋

古平官吏

2358

金に集る蠅

昭和十二年三月十五日



丁
コトウぞ百円
市恵ミ下
さい

丙
コトウぞ千円
の御喜捨を
願ひます

乙
コト一カ一萬円
出して下さい

甲
コト一カ十萬円
の寄附を願ひます



三井

三菱

2359

相剋即相生

昭和十二年三月十七日



2360

秩父御代宮殿下御渡英

(英帝戴冠式に)

昭和十二年三月十八日



2361

伊東忠太 成る
建築文献

昭和十二年三月三十一日



汗水で

三か五厘の

反故紙を

蒐めて見れば

二束三文



逝ける人

自一月一日
至三月三十一日

昭和十二年三月三十一日



公

男

候

德大寺公弘七五
橘川司亮六五
依田雄甫七四
若林成昭六七
三井壽太郎六四
佐竹永陵六六
山口玄洞七五
原鐵三郎六六
曾秋通や蝶六六
マートン・ジョンソン五三
大森金五郎七一
高山長幸七一
添田飛雄太郎七四
森永太一郎七三
島崎柳塙
松室重光
淺野長熟九六
淺野和三郎六七
河東碧梧桐六五
蘆原將軍八八

齋藤恒三八〇
長崎省吾八八
仁科盛忠七三
アリ・ルート九二
阿南正茂四六
山田良之助六六
中内蝶二六三
宮川隆司六五
兒玉誠四四
久保田米齋六四
伊庭孝五一
本多貞次郎八一
上眞行八七
武富濟六一
松谷與二郎五八
宮田脩六四
牧野謙次郎七六
三淵信三九
依岡省輔
山田智善七六

2363

拔討的集議院解散

昭和十二年三月三十一日



政府

豫算が通れば

用はふい。褒美

の金は

延べ金

じゃ



政党

「名乗り

を上げ

ず

暗討

ちとは、

左一

身は未練
赤腰拔武士



2364

神風倫敦に安著す

昭和十二年四月十日

(追記 五月二十日
返記 無事帰還)



航程一五三五七料

耐用時間九四一三五六

飛行時間五一九二三

2365

三重苦の女聖ヘレンケラー来る

昭和十二年四月十四日



聾而聰
盲而明
啞而辯
偉哉神
祕之力



一八八〇年六月二十七日米国アラバマ州タスカン比亚に生る。生後十九ヶ月にして病の爲に視力聴力を失ひ、鼻で啞とふる。尚果苦心修養學業を精進し、盲学校聾学校を卒業、五ヶ國語に通じ、一九三一年よりアルマのデンプル大学より人道文化博士の学位を贈らる。

2366

この聲を聴け

昭和十二年四月二十日



兵
將校商賣
下士職業
忠君愛國
兵ばかり

將校
困った奴等だ



2367

文化勲章

昭和十二年四月二十七日



長岡半太郎

七三

本多光太郎

六八

木村 榮

六八

幸田露伴

七一

佐々木信綱

六六

竹内栖鳳

七四

横山大觀

七〇

岡田三郎助

六九

藤島武二

七一



2368

邪教ひとのみち滅亡す

昭和十二年四月二十九日



2369

総選挙成績

昭和十二年五月二日



党派別當選表

民政	一七九
政友	一七五
社大	三七七
昭和	一九
國同	一一
東方	一一
養生	一一
政革	五
其他	二
中立	二六
合計	四六六

林

「ゴナ答ではふかつた。
 モー一度解散を喰は
 さふけれいあるまい。」





2370

ヒンデンブルグ爆破 生死七〇
昭和十二年五月七日



2371

英帝戴冠式

昭和十二年五月十二日



大僧正

「わしの手で
お前さんを
皇帝ます
るのしや
有り
難く
思ひふ
されや
アーメン



2372

双葉山全勝

昭和十二年五月十九日



二十六歳
身長五尺九寸
体重三十三貫



土州 綾川 前田 和歌山 九州 海光山 五ツ島 玉海 盤石 大坪 清水 玉錦 鏡岩

2373

ドレ機
高知の海岸に不時著
機体破壊搭乗者負傷
昭和十二年五月二十六日



2374

林内閣総辞職

昭和十二年五月三十一日



林
コリヤ
たまらん
三十六計
辞職に
しかず



2375

近衛内閣成る

昭和十二年六月五日



總理	近衛文磨
内務	馬場鎮一
外務	廣田弘毅
陸軍	荒山 元
海軍	米内光政
司法	塩野季彦
文部	安井英二
大藏	賀屋興宣
逓信	永井柳太郎
商工	吉野信次
鉄道	中嶋知平
拓務	大谷尊由
農林	有馬頼寧

政權を

握つて立つた

コノヘ公

逆かに讀めば

ヘノコありけり



2376

鬼氣陰々たるソ聯

昭和十二年六月十二日



スターリン獨裁
政府顛覆の
陰謀露見
トハチエフスキ
元帥以下八將
軍直ちに銃
殺せらる



2377

ナガハルバツト征服隊全滅

昭和十二年六月二十一日

隊長一
全生存



ふだれ姫
「またきたかい虫が
這つて来ましたよ」

ナガの
神
「つがして
おしまい」



2378

帝國藝術院生る

昭和十二年六月二十三日



「看板がかもつた
入院して見よう」

帝國藝術院

「サー入らっしゃい」



2379

乾岔子島事件

昭和十二年六月三十日



喧嘩の押しと負ふふら
買つてやる

日

ゴノ野郎
ナグタタ

ソ聯



ゴノ野郎
ナグタタ



逝ける人

自昭和十二年四月一日
至同 六月三十日

昭和十二年六月三十日



伊谷以知三郎七四

伊藤忠三六七

五十嵐直三六四

近藤義輔

浅山富之助七三

海老名弾正八二

中濱東一郎八一

中村啓次郎七一

秋山雅之助七二

シン・ロウダス・カウ

大倉保五郎八一

ヘルマン・ホフマン七四

平井千葉五六

金子馬治六八

島蘭順次郎六一

栗山泰音七八

黒井悌次郎七三

春日俊文六五

岸 一太六四

五百木良三六八

菅原 傳五

有吉 明六二

阿部房次郎七〇

大谷幸四郎六六

松井 等六二

村田 實

鈴木諦教七四

秋吉 音次六二

ワグネル・スーデン 七二

濱岡光哲

2381

蘆溝橋事件

小交戦の後
落著者？

昭和十二年七月八日



日
喧嘩の押し賣買あら
買つてやるが
命が惜しい

あら
お
じ
ぎ
して
引
込
め

支
それ
は
俺
の
方
で
言
ふ
こ
と
だ



2382

噫
噫律如令

昭和十二年七月十日



舌端赤
尾端青
混成紫
紫奪珠
誰不惡



2383

北支事變

昭和十二年七月十四日



乙獨

英米

日本

ソ聯

冀察

南京



2384

泥棒に三分の理

昭和十二年七月二十日



蔣介石

俺は排日抗日の
民意を尊重して
多年骨を折つて
来たんだが、中々
うまく行かない。
何しろ日本が
恐ろしく図々しいんで

云

一筋縄では行かないから、

已むを得ず武力を訴へるのさ。ナニ？、勝負すり？、

勝負は時の運だ、才三國が仲裁して呉れると思ふが、

そうであければ、鬼子角一戦を交へあいと、ヒッコミが
附かあくあつたね。

ナニ、大したことはあるまい、若し失敗したら

有り金を引つ攪つて亡命する迄のことさ、アハ……



2385

通州

騷動

反乱兵邦人
二百名を虐殺す

昭和十二年七月二十九日



2386

めくら滅法 上海空戦
支機狂態

昭和十二年八月十五日

我が海軍陸戦隊善戦し

敵機数臺を射落す

支那空軍
敵も味方も善戦も
あるやんが
手當次第に
爆撃してやれ



2387

皇空軍敵機百五十餘を撃つ

昭和十二年八月十九日



2388

米 佛

お節介は無用

昭和十二年八月二十日



「英
俺は委せ
れはうまく
さばいて
やるがふ



「支
負けるもんか……
助け船ー

「日本
お前たちの
知つたことじ
やない
お節介は
無用



支那遷都評定

昭和十二年八月二十五日



甲 蔣先生、福建はいかい

「覆險で縁起がわるい

乙 廣東がいくだらう

「いや、疍頓は困る

丙 廣西あら

「窖井であほ困る

丁 湖南はどうだ

「痼難でいけあい

戊 陝西は大丈夫だ

「いや、蹶勢じゃ駄目だ

己 甘肅が安全だらう

「陷縮では見込があい

庚 四川は理想的だ

「馬鹿言へ。死線じゃあいか

辛 貴州まで退るか

「奇襲を受けるだらう

壬 夫では雲南より外あい

「いよく運難で滅亡か



2390

ソ支密約成る

昭和十二年八月三十日



ソ支密約成る (支) てはツッヤをめ狗のこ (ソ)
喰う ことには しゃう



怪しからん 奴等だ (日)



2392

地中海の辻斬

昭和十二年九月二日



伊太利
「悪の報いだ
覺悟しろ」

ソ聯
「暗討は
ひどい」



2393

察南自治政府成る

昭和十二年九月四日



徳王

「憚りながら
日本といふ
旦那が

ついて居
るんだ

貴様とは
縁を切
つたよ



2394

出征風景

昭和十二年九月六日



2395

千人針

昭和十二年九月十日



一針縫つては
君のため
二針縫つては
國のため
死線を越えて
五錢
苦戦を越えて
十錢
合せて銃後戦
(十五錢)の
御報捨を



支那聯盟に提訴す

昭和十二年九月十五日



支
「モシく、日本が
無茶苦茶に攻めて
来るので
やりきれず
せん、何とか
して下さい」



国際聯盟事務局

聯盟

「ナンジャ……」

今誰も居

らんでな

宋美齡の金切聲

昭和十二年九月十六日



宋美齡

「お前さん達は何をボンヤリして
 るんだ。あの日本の氣ちがい
 めを黙つて見てるやつがあるか。
 狙しはこの宋美齡と、世界一の
 英雄の、元たしの亭主の蔣介
 石を見殺しにする気かへ。」

2398

保定滄州陷落

昭和十二年九月二十五日



鼠
逃げるは勝ちだ
るける



2399

兩雄會見

昭和十二年九月廿五日



ムンリーニ
世界の
英雄は
「君と僕」
ニラトラー
さ
露佛は
狗鼠
英米は
狐狸
唯だ日本
獨り談る
に足る。



逝ける人

自七月一日

至九月三十日

昭和十二年九月三十日



ウダイリツブ七三

大佛輔毅八〇

權藤成卿七〇

和田英松七三

細井岩弥七五

下 啓助八一

田代皖一郎五七

中川孝太郎六五

伯 後藤保弥太四二

小杉武司五八

グエルモマルニ七三

松浦有志太郎七四

小泉策太郎六六

前田復三六一

内田良平六四

山口孝吉六五

牧田 太

伊東陶山六七

前山久吉六六

中村精一六一

花岡毎丈六四

内藤太郎五四

日向庄作七〇

津下紋太郎六八

塚本 靖充

松井兵三郎六四

隈元政次八三

高松豊吉八六